

## 鄧演達研究の空白を埋めるか

——「鄧演達家族宛直筆書簡」の発見とその史料的价值——

細井和彦

はじめに

鄧演達は、一九三一年八月十七日、フランス租界で新党（中国国民党臨時行動委員会、現在の中国農工民主党）の幹部訓練班で講演中に租界当局に逮捕された。上海公共租界巡捕房に連行され、すぐに取り調べを受けた。供述書には「鄧演達、既婚、三十五歳、広東人。上海に帰国後、ほぼ一年になる。住所不定。この一年間、中国各地を訪れたが、ほとんど上海にいた。（以下、略）」<sup>①</sup>と記録されている。この後、法的手続きに則った裁判がおこなわれ、速決した。有罪だった。鄧演達は南京国民政府側に引き渡され、専用の護送列車が用意され、ものものしい警備の中、南京に護送されたのだった。

南京での生活はまあまあ自由だった。監禁生活とはいえ、優遇されていた。鄧演達と既知の南京政府の要人が入れ替わり立ち替わりさまざまな優遇条件を持って説得に訪れた。鄧は東北の対日情勢悪化もあり、毅然とした態度で南京国民政府反対の主張を曲げようとしなかった。ちょうど隣の部屋には唐生智の謀反を教唆したとして蔣百里（方震）が投獄されていた。蔣百里の妻、左梅と娘は南京市内に寓居し毎日のように面会に訪れていた。けれども鄧演達に訪れる家族はいなかった。妻の鄭立真は南京にやって来なかった。鄧演達は蔣百里の娘から「鄧おじさん」と慕われ、毎日のように珍しい話をせがまれたという。妻ともほとんど起

居をともにしたことがなく子供もいなかった鄧演達にとって、蔣百里家族との接触は囚われの身であることを忘れさせる、心の安らぐひとときだったのではなからうか。また左梅は鄧演達から託された手紙を外部に持ち出して、誰かに届けていたという<sup>②</sup>。

残念ながら左梅の運んだ鄧演達直筆の書簡（メモ書き）は五通を除いて行方知れずであるし、もっとたくさんあったのかも不明だった。ところが、二〇〇二年に鄧演達の妻や実兄、父母への「家族への愛情」を垣間見ることのできる書簡総計三十一通が発見された。すでに公開されている書簡は親しい友人や同志宛てが大部分であり、新たに日の目を見ることとなった書簡史料とは、内容的に性格を異にしていた。くわえて、新規書簡史料は既公開書簡史料の時間的空白を埋めているのではないかとして注目を集め、すでに二〇〇三年三月十日に広州で「鄧演達家信研究会」が開催されている<sup>④</sup>。

小論では、まず「鄧演達家族宛直筆書簡」（以下、「新書簡」と略称）の出現の経緯を紹介する。次に従来の鄧演達研究の定説にどのような影響を与えるのか否かについて、既発表の拙論を含めた鄧演達の先行研究を用いながら照合し、分析を試みてみたい<sup>⑤</sup>。

## 一・家族への手紙の来歴 出現の経緯等

まず最初に「新書簡」が我々の目に触れることになった経緯を整理してみたい。

梅日新(前広東鄧演達研究会会長・故人)によれば、「新書簡」は二〇〇二年末に鄧演達の跡継ぎである鄧京育女士(故人)から当時広東鄧演達研究会会長だった梅日新に寄贈されたという。「新書簡」は計三十一通、総字数は三万字を越えるものである。そのうちの三十通が鄧演達の妻の鄭立真に宛てられており、残りの一通が実兄の鄧演存宛てである。「新書簡」の書かれた日付は、一九二五年から二六年、一九二七年から二九年に鄧演達がソ連・欧州へ出国した期間と一九三〇年上海に帰国してからで、比較的長時間であることがわかる。そもそも鄧演達の妻の鄭立真が保存していた。

鄭立真は鄧演達が一九三二年に犠牲になってから香港に住んでいたが、一九三九年に乳癌が原因で治療の甲斐なく他界した。「新書簡」は鄧演達の遺品等とともに彭澤民<sup>⑦</sup>の手に渡り保管された。新中国成立後、当時政務院政法委員会副主任兼全国華僑連合会副主席に任命された彭澤民は、中国農工民主党(一九三〇年に鄧演達が党首となり結成された中国国民党臨時行動委員会が名称を変更した政党。現在の中国では民主党派と呼ばれるうちの⑧)一つ)広東省委員会を通じて中国農工民主党中央委員会に送付された。一九六六年から始まる文化大革命に際しては、季方<sup>⑧</sup>が「新書簡」をはじめとする鄧演達に関する資料を秘かに運び出し、自宅で保存した。季方は鄧演達の資料がいわゆる「革命の対象」とされ、紅衛兵に破壊されることを極度に恐れていたのだという。季方は幸いにして周恩来(当時の國務院総理)から重要保護対象人物の一人に指名されていたため、家宅捜査を免れた。季方死後、娘の季明が父季方の遺品を整理中に「書簡」を発

見、コピーを鄧京育に送ったのだという<sup>⑨</sup>。こうして「新書簡」が七十年以上の歳月をへて、我々が目にするようになったのである。

以上が「新書簡」発見(出現)の経緯であるが、次に基礎的な整理をしておきたい。「新書簡」の書かれた日付から、「新書簡」が従前の研究どの時期の部分に史実の変更を迫る可能性があるのかという点である。筆者は以前鄧演達の生涯を、以下のように区分したことがある<sup>⑩</sup>。この区分の考え方は、現在も変化していない。

第一期―誕生から一九二四年のはじめまで。軍人となるための学問を積み、粵軍第一師で将校として勤務した。

第二期―一九二四年二月から一九二六年五月までの黄埔軍官軍校で教官として勤務する期間。途中に一年あまりのドイツ留学期間をふくんでいる。

第三期―北伐から武漢政府時期、一九二六年六月から一九二七年六月まで。

第四期―二度目の出国渡欧時期で、第一次国共合作崩壊後にソ連と西欧に出国した、一九二七年七月から一九三〇年五月まで。

第五期―帰国して中国国民党臨時行動委員会を組織する期間、すなわち一九三〇年五月から一九三一年十一月二十九日の殺害まで、である。

「新書簡」は三十通が妻の鄭立真宛であり、年代は以下のようになっている。

一九二五年が十三通、二六年は四通、二七年が二通、二八年は八通、二九年は二通で、三〇年は一通しかない。一九二五年は二月十日付けの書簡が最初で、十三通目は九月七日である。一九二六年の書簡は一月か

ら五月にかけての日付であるから、上の第二期に属する。一九二七年の二通は十月と十二月で、二八、二九年を合わせてすべて第四期の間に書かれている。このように「新書簡」は大部分が第二期と第四期の期間中に書かれたことがわかる。

第二、第四期は、鄧演達一回目と二回目の出国渡欧時期であり、この時期に集中している点が第一の特徴である。出国渡欧はこれまでその原因と理由、経路と行き先、目的と活動すべてに渡り、解明が試みられてきたが、いまだに事実関係が曖昧な点もある。ほかにも中山艦事件以後、国民革命軍第一軍政治部主任に任命され、汕頭に赴いた時期の書簡（筆者はこの人事を一時的な左遷と評していた）もある。国民革命軍総司令部政治部主任就任前であり、就任理由を探る新たな発見がある可能性も存在する<sup>⑩</sup>。ただ、これは予想通りだったのだが、北伐から武漢政府時期のそれは一通もない。戦闘と新政府建設に勤しんだ証左である。啓蒙的な要素が含まれているのが第二の特徴である。たとえば、一九二五年二月十六日付けのシンガポール停泊中の書簡、同年三月一日インド洋航海中の船上からの書簡、同じく八月四日にモスクワ出発直前にベルリンで書いた書簡（編集者による日付の考注あり）、九月七日にモスクワで書いたそれらにはすべて、手書きの地図が付されている。妻の鄭立真や父母兄弟に自分の所在を知らせると同時に、外部世界の事情を教えようとしているのである。我々からすれば、鄧演達の外国認識の一端を知ることが可能である。

では次に「書簡」の日付が集中していた二回の出国渡欧時期について、それぞれ考察してみよう。

## 二・第一次出国時の経路と欧州生活

まず従前の拙稿では、出国経路を「北回り」と事実認定していた<sup>⑪</sup>。つまり、上海から海路ウラジヴォストーク経由でシベリアを横断してモスクワを経由してベルリンに到着したと記述していた。ところが事實はまったく異なっていた。鄧演達は「南回り」の経路を利用したのである。

一九二四年秋に、鄧演達は黄埔陸軍軍官学校の職務を辞して広州を離れた。十二月には上海のフランス租界ラファイエット通りにある一室に寓居していた。ドイツへの出国準備をしていたのである。張難先に手紙を書いたのが、十二月二十四日である。一九二五年二月十日の書簡には、「私がお前と上海で過ごした三ヶ月以上におよぶ日々は……」と書いている。この書簡はマニラに停泊中のドイツ行き船の船中で書かれているから、遅くとも十月末には辞表を提出して出国準備の行動を起こしていなければならぬ。さらに、鄧演達は十一月に四川視察を兼ねて三峡下りをしたと述べている回想もあり、これを事実とすれば、十月上旬に広州を出立した可能性も残る。ただし十月には広州で商団事件が発生、十五日の孫文の命を受けて、黄埔軍校の学生を率いて作戦に参加している。総合的に判断すれば、「十月末広州出立説」が成立するだろう。

鄧演達は鄭立真とともに上海から海路香港に赴いて別れを惜しんだ。「お前は五日正午に私を見送りに来て下船したが、そのときの光景は脳裏に焼き付いている」<sup>⑫</sup>と書いている。鄧演達の乗るドイツ船籍の客船は、二月五日正午ごろ香港を出発し、八日早朝フィリピンのマニラ港に入ったことがわかる。八日午後にはドイツ人の友人とともに上陸し、九日間でマニラの街を見学している。若干余談にはなるが、書簡にはマニラ港に入るまで疫病の検査があり、停泊後に税関職員が来て入国検査をした様子が描写されている。港湾設備、検疫・税関検査・入国審査のシステ

ム、郵便といった要素は、二〇世紀二〇年代には国際公共財としてグローバル化されていたこともわかる。鄧演達は入国審査の際に、中国人と外国人との待遇に差別がある点に強く憤っている。出国前後の経緯は鄧演達の伝記でもあいまいに書かれていたのだが、「書簡」の出現によってはっきりしたわけである。

鄧は二月十五日午前八時にシンガポールに到着、朝食後に上陸した。友人の友人に案内され夕方まで街を見学した。シンガポールの印象を、「香港と同様に、我々中国人の世界だ。違いは中国人クーリーがインド人に、中国人巡査がマレー人に代わったにすぎない」と述べている<sup>⑮</sup>。十六日の午後シンガポールを出発、十七日午後スマトラ島のメダン、バンダアチエ（二十日早朝）を経て、インド洋を航行した。コロンボ（スリランカ）に上陸して同船しているドイツ人三人、ロシア人夫婦らと一緒に観光もしている。コロンボ在住の中国人はきわめて少なく、鄧は市内を探しに探して一軒中国人経営の商店をようやく見つけて話を聞いた。店主が言うにはコロンボ在住中国人は四十人前後だということ、現在（一九二五年当時）中国人は世界中にいるのにコロンボには中国人がこんなにも少ないとは驚くべき事であると感想を述べている。

船は二月二十四日午後四時半にコロンボを出航した。鄧は香港出航後から船酔いに悩まされていた。ところが外洋では不快感も解消された。波は高かったがしだいに収まり、手紙を書いている三月一日までずっと「まるで西湖周遊のように穏やかだ」と余裕がでている。また船上では「子供運動会（鄧を含めた乗客が十マルク程度で子供たちのために買った賞品あり）」、「大人の仮装舞踏会」が開かれ、レクリエーションで船旅を楽しむ様子もうかがえる。船は三月一日にはペニン（Penin）島（ソマリア沖の小島）から七百マイル（約一一二七キロ）離れた地点に達した。燃料（石炭）と水を補給するために停船した。それから紅海を地中海方面に向け

て航行、スエズ湾に入りスエズ運河を通過して、ポートサイドから地中海に入った。現地の情報を詳細に手紙に記録している鄧演達が、通過時間にほぼ二日間程度かかるはずのスエズ運河に関して一言も述べていないのは不思議である。スエズ運河の戦略的重要性や三峡下りの長江の情景と比較した感想ぐらいいはあってもよいはずである。船旅も終わりに近づき疲れたのであろうか、もしくはドイツ到着後の計画でも練っていたのか、非常に多忙でなかなか手紙を書く時間もないと書いている<sup>⑯</sup>。

鄧演達を乗せた列車は三月十五日にフランクフルトに到着した。十三日にジェノヴァで入国許可を得て上陸し、一ヶ月以上にわたった船旅に別れを告げた。十四日に列車に乗り込み翌日到着したのだった<sup>⑰</sup>。十七日早朝フランクフルトを発ち、夕刻に最終目的地のベルリンに到着した。高語罕の手はずで数日間宿泊可能な部屋をえた。ベルリンで高を訪ねたのは上海で施（詳細不明。施存統か）という友人に紹介されたからだった<sup>⑱</sup>。十九日以後は自分で部屋を借りてベルリンでの留学生活がはじまった。ベルリンの印象を、「私は多数の中国人の中でも開けている人間だと（自負している）が、今欧州のベルリンに到着してみると、田舎者が大都会に出てきたのと同じで、（見るもの聞くものすべてに）心を迷わされ、どうしてよいかわからない」と書き送っている<sup>⑲</sup>。当時ベルリンは世界有数の大都会であり、上海生活を体験しているとはいえ、戸惑いは大きかったのである。

十九日にはシャルロッテンブルグ（市の西側）の大通りに面した建物の一室を賃貸した。この地区には中国公使館があるからか、中国人ドイツ留学生の九割が居住していた。鄧演達の部屋は路面電車が通り、駅にも近いのでとても便利だった。部屋代は五十マルク、室内清掃代・布団カバー洗濯代・暖房代・温水供給代を入れると六十五マルク（二十八中国元）になった。上海に比べてかなり安いと述べている<sup>⑳</sup>。食生活の記述も詳し

い。家主が買ってくれた小さなパン四個と約二五〇gの牛乳、バターと砂糖で朝食をとる。午後一時になると昼食である。ドイツ人向けのレストランか中国人が経営する食堂で外食する。費用は一マルクほどである。夕食も昼と同じく外食だった。食費は一日三・五マルクかかった。この食生活パターンは中国人ドイツ留學生の標準的食生活だったという<sup>24)</sup>。

一月の生活費の合計は特別な出費がない限り、二六〇マルク(二二〇中国元)あれば充分だった。生活費には部屋代と食費のほかに、クリーニング代が一着につき〇・二マルク、ほかに交通費と学費が一月六〇マルクも含まれている<sup>25)</sup>。

鄧演達は保定陸軍軍学校在学中、すでにドイツ語を学んでいたから、基礎はできていた。それでも家主に一時間三マルクを払ってドイツ語を教えてもらった。四月二十三日からベルリン大学内に設けられた「外国人ドイツ語補習所」(期間は二ヶ月)に通い、ドイツ語能力のアップに努めた。その結果、五月末にはドイツ語の新聞を読んで七、八割を理解できるようにになった。鄧演達自身も二ヶ月後には専門書が読めるだろうと予測している<sup>26)</sup>。

毎日背広を着て外出するという風に生活習慣が変化するにつれて、これまで「悪」と意識していなかった中国人としての習慣が、「悪」＝「改めるべき」習慣と認識するようになった。公民としてのマナーが両国間では異なっていた。ドイツ人は中国人とは逆で、公衆の面前では大声で話さず、演説会で自己主張する場合には声を張りあげたのである<sup>27)</sup>。鄧演達は習慣をドイツ式に改めたと書いているから、外部要素から影響を受けて洋装するという外面だけでなく精神世界も変化していったのである。

### 三．一回目の出国渡欧理由と目的

筆者は以前、張難先宛の書簡を根拠にして、鄧演達の一度目の出国理由を分析した。張宛の書簡は出国一ヶ月前に書かれたものであり、一次資料だったからである。従来の研究の定説では、蒋介石が王柏齡と何応欽を使って排斥したと解釈されていたのだが、筆者は以下のように述べていたので、定説に異を唱えていたことになる<sup>28)</sup>。

まず書き出しの部分では、張難先に四カ月間音信不通であったことを詫び、「何度か手紙を書いて自分の心中を説明しようとした」が、「的確に表現できず、すべて途中で諦めざるをえなかった」からであると、理由を説明している。複雑な心境をそうたやすくは、整理できなかつたのであろう。(中略) 次いで、黄埔軍校の離職を決意させたのは、ソ連から援助の武器が到着したときであったと述べる。十月七日の夕刻、礼砲が打ちならされるなか、ソ連船ヴァラフスキー号が、黄埔軍校の正面波止場に停泊した。武器の不足は深刻であり、ヴァラフスキー号まもなく入港との知らせが伝えられるや否や、軍校の師弟は、喜び勇んで貯蔵庫の準備や管理体制の整備、船長と船員の歓迎の準備をしていた。届けられた武器は、山砲、野砲、歩兵銃、ピストル、重機関銃とそれぞれの弾薬であった。教官と学生が臨時の人夫となり武器を荷揚げしたという。活気溢れるなかで、鄧演達は辞職の決意を固めていた。それまでは人材不足で、蒋介石の意向を聞き入れて「馮婦」となっていたが、今に至り、「人材は集まり、それぞれが官職に就くことを渴望している」状態なので、職務を途中で投げ出すのは、「党と友人に対して筋が立たない」気持ちだが、きつぱりと立ち去ることにしたのである。驚くべきことに、「私

(鄧)の行動は五年前から既に決めており、「たびたび決行しようとしたのですが、結局のところ、時局に束縛されて成就しませんでした」、そして「鬱々としながら今に至った」と述べていることである。五年前といえ一九一九年、すなわち保定軍校卒業後である。鬱々とした気持ちは、「囚人が獄に繋がれ」、「新鮮な空気と太陽の光を渴望してもかなわない」状態なのであった。ここから、鄧出国の理由を蒋介石との人間関係に求めるのは、あまりにも意図的であることが理解できる。渡欧の動機は、鄧の内部から発していたのである。

では、渡欧の目的は何だったのか。さらに続けて手紙を見ていこう。「段祺瑞の執政以後、我が国の進歩は遅々として内実を伴って」おらず、「国民の思想は幼稚で蒙昧」な上、「国の経済力がいきまづまっている」と近年の国内状況を観察している。恣演達にとって「外国人の束縛や辱めから逃れる」方策は、「国際的な革命団体に加入して世界革命のために努力し、共同して大敵を除去する」ことであつた。この救国の計を実現するため、国民一人一人に伝統的環境から抜け出し、「社会科学の書籍を読み」、「社会進化を承認」し、「進化の条件を事実をもって証明する」姿勢を求めている。けれども、救国を実現する中核となるべき国民党には、学問を修めた「真の人材がない」のである。鄧演達は、自分が学問を修め、救国の計の現実化に突き進まなければならないと決意したのである。それゆえ、留学を決意した。これが根本の原因である。

「新書簡」の公開で、鄧演達の出国理由がいつそうはつきりした。最近では、定説に従って論述していた研究者も解釈を改めはじめている。<sup>26</sup>

再び「新書簡」に注目してみると、四月十九日の書簡では、広東統一

の戦闘に黄埔軍校の学生が活躍している状況の感想を述べた後で、「私が今回一切を辞してドイツに来たのは、革命の道理を研究し、民衆に革命の道理を理解させる方法を研究するためである。将来私が帰国したなら、革命の道以外歩む道はない」と述べている。<sup>27</sup> また一九二五年五月十七日の書簡でも、「私が今回広東革命政府から離れて、担当する全職務を放棄して、ただひたすらにドイツ、ソ連に来たのは、ここ数年来我々の革命党―中国国民党―がうまくいっていないからなのだ。だから革命の状況はいつも作り出せないし、残酷で欲深い軍隊がいて、商人の代弁者官僚の発言だけがあり、民衆の苦痛は日々増加するばかりで解決法がえられないのだ。私が軍隊で奮闘したのも、革命の方策を準備できていないと感じたからであるが、方策を改めなければ革命は成功しないとしよっちゅう感じるようになったからで、二度と過去にはもどれないのだ」と述べている。<sup>28</sup> 八月に入り鄧はベルリンからモスクワに向かう。その目的も、「実際に革命が成功したロシアの様子を見学し、ついでに革命の知識を獲得しなければならぬからである」とモスクワ到着後一ヶ月が過ぎてから書いている。

以上の事実から、やはり出国理由は将来の革命事業遂行の理論的構築だったのである。理想の革命を求める鄧演達の熱意に対して、廖仲愷は兄の鄧演存を通じて早期帰国を促していた。広東の国民党は人材不足に陥っていたのである。「革命の道理と方策をドイツとロシアから学びとつてから帰国する。でなければ帰国しても事業に携われない」と述べて、<sup>29</sup> 鄧は今しばし待つてほしいと返答したのである。

#### 四・二回目の出国渡欧で不明な事項について

二回目の出国の理由は国共合作の解消が原因だった。渡欧期間は、

一九二七年八月から三〇年五月まで約三年間と長期間である。渡欧中、中華革命党（中国共産党を除名された平山が国共合作崩壊で革命活動に失望した中国共産党員と中国国民党員を集合して成立）を結党した国内の同志たちから、早期帰国の要請があったにもかかわらず帰国を拒んだ。鄧演達はまた自らの革命理論と方針、方法が構築できていないとして要請を拒否し、研究と調査のためドイツ南部・フランス・イギリス、欧州各国を巡ったのである。

「新書簡」では出国当初はモスクワ中山大学で革命理論研究をし、コミンテルン・ソ連指導部から中国国民党に対するこれまでと変わりない革命援助の実行という言質を獲得してから、数ヶ月間で中国へ帰国するつもりだったことがわかる。しかしながら、スターリンと会見してみても、結果は鄧の期待を裏切る内容だったわけである。そこで一九二七年十月末にはカザフスタンで宋慶齡、陳友仁と以降の計画を協議、早期のベルリン行きを決定したのである。すなわち渡欧が長期化した原因の一端は、モスクワでの経験にあった。頼みにしていたソ連とコミンテルンから物質的支援を獲得できなかったからである。けれども、少なくともこの時点でベルリンを拠点にした長期留欧生活を考えていたとも考えにくい。

渡欧の行程については既公開の書簡集<sup>③</sup>を利用した研究が進展している<sup>④</sup>。思想面の分析でも、ベルリンで執筆したとされる「我々の思想系統及主張根拠」（この冊子自体はいまだに発見されていない）が所々引用されている太任の「択生同志的思想輪郭」を使用した分析が進んでいる<sup>⑤</sup>。思想面の研討以外で問題になるのは、第一に「資金」出所の問題である。鄧演達の滞在資金と新党（中国国民党臨時行動委員会のこと）結党準備資金である。なぜならば、鄧は新党の運営問題に悩まされるからである。もう一つは、新党活動拠点の問題である。では「新書簡」を読みながら、順番に考察してみよう。

「新書簡」を読むとまず逗留資金不足が出国当初から大きな問題だったことがわかる。一九二七年十月二十二日付けのカザフからの手紙では、「すぐに断金学会<sup>⑥</sup>から二千元を香港銀行からベルリンの廖煥星に送金して、私に渡すように（ただし「国民党当局に」漏れる可能性があるので私の名前は書かないように）。急ぎ必要なので、住所は別の紙に書いておく」と資金不足を訴えている。送金がなかったのだろうか、それとも足りなくなっただからだろうか。「まだ住む場所も決まっていないが、今はお金が必要だから、すぐに三千元送金してほしい。送金先の住所は別な場所に書いておく。必ず（丘）萼華に頼むように。電信為替で頼む。今孫夫人（宋慶齡）からお金を借りている」と訴えている。二月後には、「現在は革命を準備する時期であり、すべての費用は必須である。私はすでに断金学会の全公金を新組織に注ぐことにして、嚴重等に知らせた。この公金の用途は至急であり保存を頼む必要があるので、丘萼華同志を学会の公金保存人として委任した。お前はここの手紙を読んだ後、学会の預金（個人のものを除くこと）全額と領収書を丘萼華に引き渡すように」と述べている<sup>⑦</sup>。急いで公金管理業務を丘萼華に全面委託するようにと、三月一日にも書いている。

鄧演達の概算では断金学会の資金総額はおよそ三万元ほどで、丘萼華が資金管理をすることになった。断金学会は保定軍官軍校在学時に鄧演達が嚴重と陳式恒の三人で組織した軍事学を研究するための学術サークルである。「三人の心を一つにすれば、金でも切断できる」が断金の意味である。粵軍第一師第三团团長時に鄧演達が、一万元あまりの資金を集めて貯蓄して、会員が必要なきにちいたという。団全体に組織を拡大して福利厚生を目的として積み立てて資金を集めた。規約や会員数などはまったくわからないが、黄埔軍官学校出身者も勧誘していたらしいことはわかっている。プールされた資金は、経済的に困難な同志の救

済に使用された。「鄧演達遺札」を読めば、欧州逗留資金は断金学会から供出されていたことはわかってはいた。ただ「書簡」から断金学会などの資金管理に妻の鄭立真と丘萼華が深く関わっていたことが判明した。丘萼華の名前は既公開書簡にも登場していたが、妻である鄭立真の役割は明らかではなかった。鄧演達の欧州生活の資金源は主に断金学会と革命同志たちの援助で成り立っていた。新党設立準備のためには資金は完全に欠乏していたから、鄧演達は総政治部主任交代時の剰余資金（委細不明）も活動資金にしようとして、鄭立真にこの件を丘萼華に委託するよう頼んでいる。丘萼華は鄧演達の資金管理者になったわけだから、よほど信頼が厚かったのだとわかる。

ところが、断金学会の公金からの援助、丘萼華への管理の引き継ぎを巡って、鄭立真との間で意見の不一致が存在した。意見の不一致といえば大げさに聞こえるかもしれない。遠く離れており、些細な行き違いと表現した方がよいのかもしれない。ともかく、鄭立真は鄧演達に断金学会の公金を自分の留欧生活費のために使用すべきではないと、鄧演達に意見した。鄧も「将来何とか報いたい（返済するという意味か）」と述べ、反省している様子がかがえるが、鄧演達の留欧生活資金はずっと断金学会から出ていた。送金金額では鄭立真に疑惑が生じたようである。鄧は送金金額は丘萼華と季方に伝えれば問題はないと述べている。

鄧の情勢分析では一九二九年の時点で革命の高潮期はまだ到来していなかった。だから鄧は中華革命党の政治綱領を承認しなかったし、新党の政治綱領作成（「研究」と「準備」）に没頭したのである。一九二九年十月二十四日付けのロンドン滞在中の丘哲宛の手紙や六月九日の季方宛書簡にを読めば、一目瞭然である。また帰国後の工作種類を文化工作に決め、新党の活動計画実行地点を中国国内だけではなく、国内ではなく周辺地域に求めた。「南洋」（マレーシア・シンガポール・スマトラ島）と「日

本」である。この点について「新書簡」の記載は、一年近く早い。一九二八年三月一日である。ベルリン到着直後、手持ちの資金もそこを尽き送金を請いながら、不眠症に悩まされ療養のため入院中にもかかわらず、この日の書簡では郭冠杰を近く日本に派遣する旨を伝えている。それと同時に、「国内の状況が急を告げているから私自身が急ぎ帰国しなければならぬ。私は近いうちに秘密裏に帰国する」と告白している。鄭にこのことを郭本人に伝えるようにと頼んでいる。国内状況とは、おそらく前年十二月に広州で発生した武装蜂起によるソビエト政府樹立を指すのであろう。ただ鄧演達が帰国の行動を起こす以前に、すでに鎮圧されてしまい帰国しても何ら意味がないことが判明したため中断したのである。「新書簡」の三月一日付け手紙に一番日付に近い「鄧演達遺札」の書簡では、「新党のすべての主要な工作、たとえば成立宣言と綱領、党綱、組織法等々は、一週間以内に退院した後すぐに工作を開始する」と説明し、ほかはいくつか国内活動の指示をしているだけで帰国の文字は見あたらない。これは「鄧演達遺札」の一番最初に出てくる季方宛書簡で、日付は三月五日である。「新書簡」の手紙とは五日間しか時間差がないので、帰国の文字が一字もないのは非常に不可解である。次の書簡は一月以上経過した「鄧演達遺札」所収の四月二十二日付け書簡である。まだ新党に希望が持てないので自分の主張が実現できないから、中国革命を達成できないと書いている。一九二八年に帰国する可能性は、「革命の高潮期」が到来しない限りなくなつたと判断してよい。

一方で日本を拠点とする計画であるが、「鄧演達遺札」に収録された季方への書簡末尾に、「郭冠杰と相談して、中日字典（政治哲学経済の用語を解説してあるもの）、日独字典（政治哲学経済の用語を解説してあるもの）一冊ずつ、それと日本語で書かれた明治維新史と最近の政治経済の状況がわかる書籍一、二冊を至急購入してほしい。」と要求している。日付は



一九二八年五月となっている。鄧演達はベルリンで日本語学習を開始しようとしていた。ということは、日本を新党の活動拠点の一つに考える計画自体は変えてなかったのである。

### おわりにかえて

「書簡」に記載された内容が鄧演達に関する既成事実に変化をあたえるのではないかという予測のもと、「書簡」の大部分が書かれた二度の出国渡欧期間を中心に、論を進めてきた。一回目の出国時の経路は南周りだったこと、二回目の出国は最初は短時間（モスクワまで）と考えていたこと、断金学会の資金の利用と管理、日本が新党の活動拠点候補地の一つだった事実が問題提起できた。結論から言えば、「書簡」の資料的価値は高い。

「書簡」は前後の事実を委細に記述している点、鄭立真に適切に漏れなく自分の意志と要望を伝達している点から、基となる何か、おそらくは「日記」を参考にして書かれているのではないかと推測できる。現時点で「書簡」以外に「鄧演達遺札」にも四十通が収録されているし、ほかにも手紙や葉書が十通以上ある。すべてを時間順に並べ替えて内容を分析しなおせば、基となる史料の存在の有無の可能性もより確実になるだろう。本論では未解決になってしまった論点はいくつかある。鄧演達と鄭立真との夫婦の関係、鄧演達の女性観である。二人の結婚は自由恋愛ではなかったし、同居することもほとんどなかった。鄭立真はひたすらに鄧演達の言いつけを守ったが、鄧演達の方は鄭立真に「読書と独立した生活」を要求しながら、離婚を迫ったようである。それから鄧演達は頭痛と不眠症に悩まされ、ベルリンで入院治療している。この持病が新党創立活動にどのような影響をもたらしたのかも、気にかかるといえる。

末尾になるが、鄧演達研究の現況にふれておきたい。一九九四年六月、広東鄧演達研究会が成立した。その後、研究会は国内で一連の研究活動を進展させるとともに、一九九五年と二〇〇〇年の二回、国際学術討論会を開催したし、ほぼ毎年一回、国内規模の学会を開催している。また『鄧演達文集新編』、『回憶鄧演達』、『鄧演達研究与資料』、『鄧演達画冊』と論文集二冊等、精力的な出版活動により鄧演達研究の深化に貢献している。二〇一〇年六月にも江蘇省の中国農工民主党の一党員の手になる『鄧演達年譜合集』が出版され、現在も研究成果の出版は継続している。一人物の研究がこれほど地道に継続されているのはまれである。筆者はこの夏、中山陵と鄧演達墓、雨花台革命烈士紀年館への参観する機会を得た。酷暑の中、孫文の墓を守護するように建築された鄧演達墓（中山陵の西側には廖仲愷何香凝墓がある）を参拝し、雨花台革命烈士紀年館に設けられた鄧演達の事績を紹介する展示コーナーを見学した。そこで鄧演達という人物が中国近代史の中で果たした役割が重要だと考える現政権の意志と意図を感じた。すなわち、鄧演達は現政権に顕彰されるべき人物なのである。この意志と意図を可能な限り薄めることができた時、本当の鄧演達像が現れるのではないだろうか。

### 注

- ① 「鄧演達被捕後的自述」（曾憲林 萬雲主編『鄧演達歴史資料』華中理工大学出版社・一九八八年）、三一六頁。
- ② 経緯は以下の書籍に述べられている。陶菊隱『蔣百里伝』（中華書局・一九八五年）、八〇―八二頁。李娟麗 包東波『軍学奇才・蔣百里』（蘭州大学出版社・一九九八年）、一一一―一二二頁。許逸雲編著『蔣百里年譜』（團結出版社・一九九二年）、一一一―一二二頁。
- ③ 五通は「獄中書簡五封」と題して、梅日新 鄧演超主編『鄧演達文集新編』（広東人民出版社・二〇〇〇年、五四―一五四頁）に収録されている。

- る。
- ④ 筆者は未参加であるが、十八本の論文や発言要旨がエントリーされ、鄧演達の政治思想、価値観、理想と感性、結婚観と家庭観が討論された。当日の参加人数は二十二人だったという。
- ⑤ 本稿の作成にあたって、「書簡」が掲載されている梅日新・黄濟福・黄振位編『鄧演達研究与資料』（中国文史出版社・二〇〇四年）を参照した。
- ⑥ 鄧演達の兄鄧演存の娘だったが、鄧演達に跡継ぎがないために鄧演達の娘となり、家を継ぐことになった。ほかに鄧演達の妻が養子として育てた鄧思干が香港に在住していたが、現在は故人となっている。現在、鄧演達と密接な関係を有した第一世代は故人となった。
- ⑦ 彭澤民（一八七七一―一九五六年）は広東四会の生まれ。幼少時に中国医学を学ぶ。一九〇六年、マレーシアのクアラルンプールで中国同盟会に入会し、クアラルンプール支部長となる。一九二六年、中国国民党第二期中央執行委員兼海外部部长、広州国民政府僑務委員会委員。一九二七年、武漢国民政府において中央海外部部长となる。南昌蜂起に参加、失敗後は香港に寓居する。一九三〇年、中国国民党臨時行動委員会創立大会に参加、中央幹部会幹事に当選。一九三三年の福建事変失敗後は再び香港に避難した。一九三五年に章伯鈞等と香港で中国国民党臨時行動委員会第二回代表大会を開催、中華民族解放行動委員会に党名を変更した。一九四一年には中国民主政団同盟にも参加した。一九四七年に中華民族解放行動委員会の党名を中国農工民主党に変更、中央監察委員会主席に当選した。建国後は中国農工民主党中央委員会副主席となった（張憲文等主編『中華民国史大辞典』・二〇〇二年、一七二―一頁）。
- ⑧ 季方（一八九〇―一九八七年）は江蘇省海門の人。号は正成。辛亥革命に参加、保定陸軍軍官学校で学び、一九二二年中国国民党に入党した。黄埔軍官学校特別佐官、国民革命軍總司令部政治部組織科長、武漢国民政府では中央軍事委員会總政治部軍事指揮を歴任する。一九二八年に中華革命党に参加した。一九三〇年八月、中国国民党臨時行動委員会中央幹部会幹事となる。一九四〇年には新四軍蘇中四分区司令員として抗日活動に従事した。一九四九年九月、政治協商会議に出席、交通部副部長、江蘇省副省長、全国人民代表大会と政治協商會議の常務委員を務める。また中国農工
- 民主党中央委員、主席、名誉主席となる（同⑦、一二二―一二六頁）。
- ⑨ 『鄧演達研究与資料』、二、一四四頁。
- ⑩ 拙稿「鄧演達年譜初稿―近代中国における軍人政治家考察のための一試論」（『鈴鹿国際大学紀要』No.7、二〇〇〇）では、時期区分に沿った年譜を作成した（一〇五―一二二頁）。
- ⑪ 鄧演達がこの人事異動に不満だったことは、「今回ここ（汕頭）に来たのは本当にしぶしぶだったのであり、本来はまた中国を離れて勉強に行く腹つもりだった」と記述していることからわかる（『鄧演達研究与資料』、三五〇頁）。ではどうして鄧が人事異動させた蒋介石によって総政治部主任に任命されたのかは、やはりはっきりしない。
- ⑫ 前掲、拙稿「鄧演達年譜初稿」の年譜では「北回り」の記述をしている。
- ⑬ 『鄧演達研究与資料』、二八九頁。
- ⑭ 『鄧演達研究与資料』、二九〇頁。
- ⑮ 『鄧演達研究与資料』、二九六頁。
- ⑯ 『鄧演達研究与資料』、三〇五頁。
- ⑰ ジェノヴァからスイスを經由してフランクフルトに到着する間の出来事は、兄鄧演存宛の書簡に記述したらしいが、現時点で書簡の存在は不明である（『鄧演達研究与資料』、三〇八頁）。
- ⑱ 『鄧演達研究与資料』、三〇八頁。
- ⑲ 『鄧演達研究与資料』、三〇八頁。（ ）は筆者の補足。
- ⑳ 『鄧演達研究与資料』、三一〇頁。
- ㉑ 『鄧演達研究与資料』、三一〇頁。
- ㉒ 『鄧演達研究与資料』、三一〇頁。
- ㉓ 『鄧演達研究与資料』、三二八頁。
- ㉔ 『鄧演達研究与資料』、三二七―三二八頁。
- ㉕ 前掲、拙稿「武漢時期までの鄧演達（上）」、五九―六〇頁。
- ㉖ 例えば、葉洪添「試析鄧演達出国考察的主要原因―読鄧演達先生給夫人鄭立真信件」、黄濟福「鄧演達未發表的三十一封家信对鄧演達研究的意義」。いずれも『鄧演達研究与資料』に収録された論考である。
- ㉗ 『鄧演達研究与資料』、三一五頁。

②8 『鄧演達研究与資料』、三三三―三三四頁。  
 ②9 『鄧演達研究与資料』、三三九頁。  
 ③0 「鄧演達遺札」と題して『文史資料選輯』第二十六輯に掲載された（一九九三年三月）。一年後、広東鄧演達研究会が冊子化し、研究学習活動のために会員および党員など提供した（一九九四年十月）。これに丘哲宛の書簡（『鄧演達文集』所収）などを含めた書簡と葉書を『鄧演達文集新編』（二〇〇〇年三月）が時間順に配置している。

③1 拙稿「鄧演達の二度目の出国渡欧」（『立命館東洋史学』第二〇号一九九七年）、曾成貴「鄧演達流亡期間对中国革命的思考」、周偉嘉「鄧演達従国家資本主義到社会主義市場経済論」（いずれも『鄧演達研究新論』二〇〇一年に収録）が代表的論考である。

③2 二〇〇一年一月に広州で「鄧演達思想系統及其核心学術研討会」が開催された。太任の文章も論拠の一つになった。四十三人が出席し、提出論文と発言要点は二十余編あったという。太任の「択生同志的思想輪郭」には拙訳と解説がある（太任「択生同志的思想輪郭」『鈴鹿国際大学紀要』No. 10、二〇〇三、二一九―二四四頁）。

③3 断金学会は後述のように鄧の活動資金源となった。

③4 『鄧演達研究与資料』、三五六頁。「」は筆者の補足。

③5 『鄧演達研究与資料』、三六二―三六三頁。

③6 『鄧演達研究与資料』、三五九頁。

③7 楊逸棠「鄧演達」（広東人民出版社・一九八六年）、一〇五頁。羅伯先「北伐軍総政治部主任鄧演達」（中国農工民主党中央委員会編『鄧演達』文史資料出版社・一九八五年所収）、六四頁。鄭子明「鄧演達和断金学会」（中国国民党革命委員会編『團結報』第一〇三六号、一九八九年十月十七日）。

③8 前出の季方も鄧演達の信頼が非常に厚かったもう一人の人物である。

③9 『鄧演達研究与資料』、三七〇―三七二頁。

④0 拙稿「鄧演達と中国国民党臨時行動委員会の結成」（『鈴鹿国際大学紀要』No. 5、一九九八、九七―九八頁）がはじめて指摘した。国際会議でも情報発信しているが中国人研究者の関心からはずれているのか、今のところ大きな反響はない。

④1 『鄧演達研究与資料』、三六五頁。

④2 『鄧演達研究与資料』、三六七頁。

④3 「鄧演達遺札」、四頁。

（鈴鹿国際大学教授）